Benefit of village mounts

——Food culture of the Inagawa River region (3)——

MIZUHARA Michiko SHIMAZAKI Chieko
NONAMI Yuri* MIZOGUCHI Tadashi*

Abstract

The preservation of good environments of village-mounts is closely associated with local laws such as the Inagawa Town fundamental environment plan. In addition, a symposium concerning the function of village-mounts has been held, which stimulated the enlightenment of citizens in terms of wild animals inhabiting the region, such as wild boar, and the source of timber. A unique bylaw of Kobe city, which prohibits the feeding of wild boars to prevent harmful incidents in the city area, has been discussed. On the other hand, there are special traditional foods in the Inagawa town area, the pickled radish, "Bettara duke", piled with striped bamboo leaves, rice cake wrapped with striped bamboo leaves, "Sasa okowa", and the wild boar meat dish, "Botan nabe". The preservation of special traditional foods and protection of the wildlife in village-mounts should be established on the basis of suitable wildlife management and a deep understanding by the citizens of the wildlife inhabiting the region.

* Faculty of Socio-Culture, Otemae University

里山の恵み

——猪名川流域の食文化（3）——

水原道子　島崎千江子
野波侑里*　溝口　正*

はしがき

里山の存在は、ここ猪名川流域に限らず、世界に誇る日本の財産である。私たちは、里山が環境保全に大きく寄与していることを、あまりに身近なために気づかずに遣り過ごしている。里山は、多様な生命が息づく環境である。森林、草木、こけ類、河川の生物等、あるがままの自然、そこに人々の生活があり、漁労、狩猟や作物栽培が営まれる。このような里山のなか最近、癒し育む特徴的な存在として棚田が見直されている。山あいの棚田での作業は単なる作物栽培の喜びに留まらず棚田特有の労働は、言い表しようのない作業の充実感をもたらすのである。これらの里山運動の中で共生が模索されつつある野生動物の存在は、自然環境の保全を知るバロメーターとなる。彼等の棲息は環境を知るうえで大きな意味を持つ。

里山の特徴のひとつ、野生動物のイノシシについては、すでに第一報（文献1）、および第二報（文献2）において報告した。今回の第三報では、里山を代表する猪名川流域に活動する人々、ならびに特産物に焦点を絞り論述することにした。

野生動物のイノシシは、年間をとおして飼育されている家畜とは異なり、冬季の旬の食材を提供する貴重な存在でもある。特に猪名川流域のイノシシは、全国的にも知名度が高い。料亭は競って良質の猪名川流域のイノシシを求める。この地の里山の恵みはイノシシ料理、ぼたん鍋に代表されるが、その他にも猪名川流域の特産物ともいえる食材が伝承されている。

調査方法

題材に相応しい地域に出かけ、その地区の人々から情報を聞き取り、現地写真を撮影して資料を準備した。写真を図に変換するに当たって研究員自らが取捨選択し、トリミング

＊大手前大学社会文化学部

し、編集した。プロの技術者ではないので未熟な表現があるのは止むを得ない。また、メデイア情報も年間を通じて収集し、自らの記事と比較検討した。必要な場合には再度現地に出かけ指示をうけ、内容の確認をした。

本論

環境基本計画

猪名川流域は野生動物が成育することで知られており、中でも野生イノシシの棲息地として特有の自然環境が維持されている。図1に見られるように、小高い山々が幾重も連なり、その谷間部分には棚田など農耕地が点在する。そして里山の特性を活かした特産物を生み出す自然環境にも恵まれている。その基本として緑を維持してゆくことである。猪名川町では環境基本計画を制定して、住民あげて緑の維持に取り組もうとしている。元々大阪湾の沿岸地域では環境創造をめざしてセンターが設置されており、地域的な取り組みと

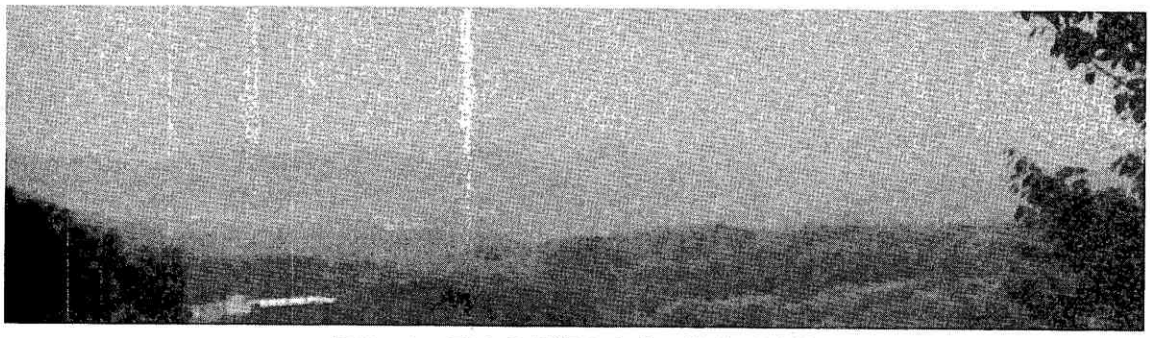

図1－1　里山の景観を有する猪名川流域

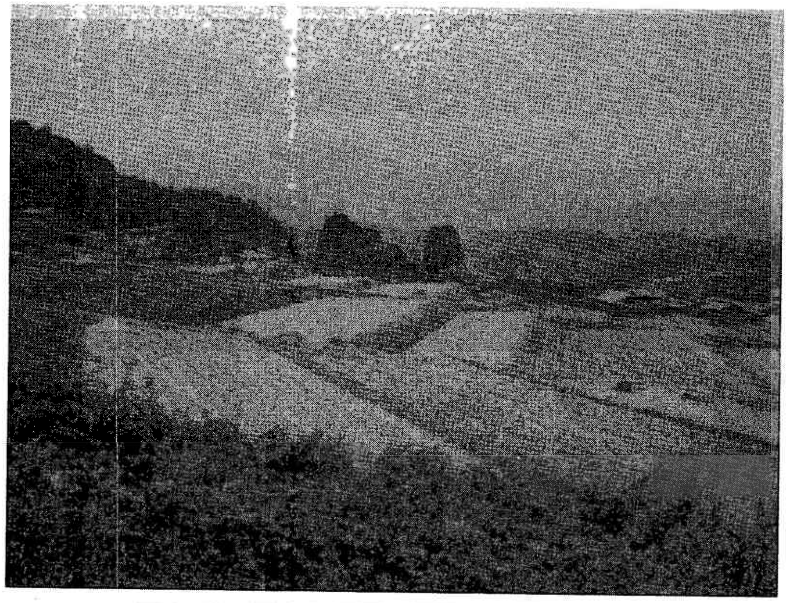

図1－2　里山と棚田が調和する猪名川流域

して猪名川町は「町環境の保全と創造に関する条例」を施行（平成12年10月）した。この条令には町民が、自分達が住む地域の自然環境を学習し、町つくりや景観の保全に積極的に参加するための具体的な努力目標を各節で提示されている。児童や生徒に対しても環境維持の学習をし里山の保全に参加を促す狙いがある。猪名川町独自のこの条例は注目に値する。

環境保全に機能する里山シンポジウム

これは里山の「緑」を維持してゆくための森林中心のシンポジウム（平成14年９月）であった（文献３）。日本の国土の特徴として７割は森林である、しかし、農地部分を含めた地域を包括して考えると、国土の４割が里山に相当する。この里山の景観は穏やかな「緑」を提供し、我々にとって自然に親しむ最良の地域である。里山は森林資源のみならず、人間を含む生物棲息の多様性を存分に生かし、水資源の浄化や土壌保全、炭酸ガス吸収などの地球環境維持という重要な使命をもつ。都市部の環境は、いわばこの里山の恩恵によって救済されており、山村を過疎のまま放置するわけにはゆかない。その意味で「国民参加の森林づくり」シンポジウムが開催されたことは意義深い。

イノシシ餌付け禁止条例

最近、里山の環境は大きく変わった。それは人里にイノシシが出るようになったことである。原因のひとつは、舗装道路が里山にもどんどん伸び、大切な落葉樹林等が伐採され野生動物の餌が乏しくなったことである。また、心無い人々が林道沿いにゴミを不法投棄し、野生動物の格好の餌を与えることも原因である。それを辿ってイノシシは人里の民家にやってくる。イノシシにとっても高速道路が敷かれたため生息地である里山が分断され、誤って道路を横断する内に輪禍に遭遇（平成13年11月、徳島自動車道５頭のイノシシが死亡）したりする（文献４）。一方、住民がイノシシ傷害を蒙る事件（平成14年11月、京都府嵯峨野地区、文献５）が関西地区で度々発生している。神戸市の市街地では頻繁にイノシシが出没して街のゴミをあさるなど住民生活に被害が増加してきた。市街地の人々に危害を加える懸念もある。観光客等がイノシシに餌を与えるため、六甲山麓はイノシシの出没が多い。そこで神戸市では、イノシシに餌を与えることを禁止する条例を作った。本来、イノシシは野生動物であるから、住民に頼ることなく里山で充分生活できる。市民をはじめ観光客も含め、ひとは野生動物に干渉しないことを認識する必要がある。

イノシシ被害の対策

里山の田畑で農業を営む人々の悩みは、農作物に対するイノシシの被害である。特に山陰・中国地方の里山の農家に被害が多い。一夜にして収穫前の水田稲作が食い荒らされた

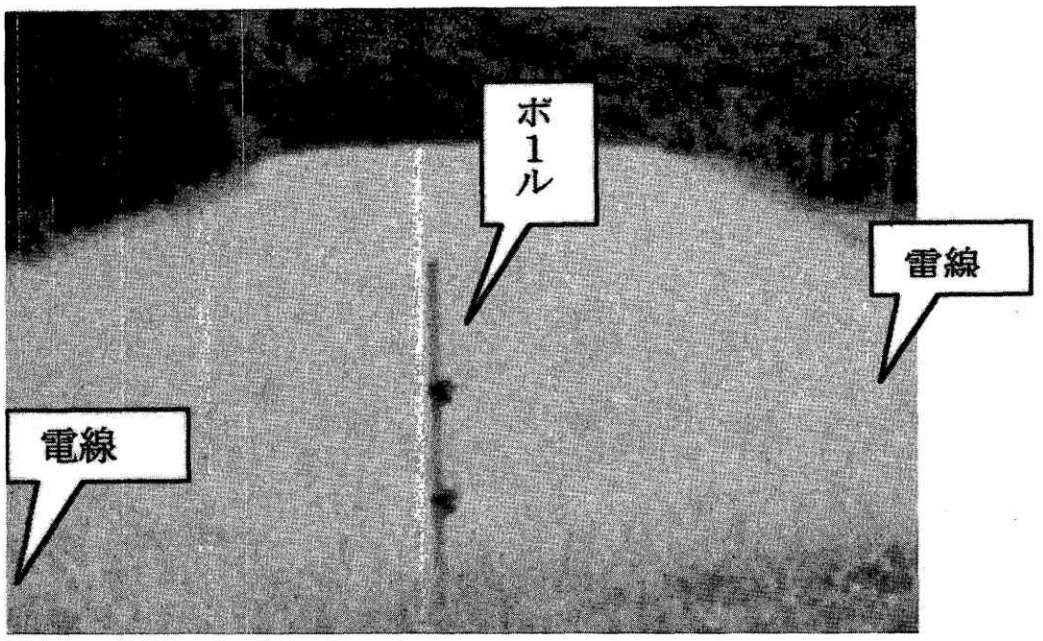

図2　電気柵を設けた稲作田

りする。古い家屋を放棄して廃屋になってしまい、イノシシの棲家になった例もある。また、休耕田にしたため、ススキが田畑に繁茂し、イノシシの隠れ場所になったり、クヌギ、コナラ、ドングリ等の灌木が茂り、木の実を付けるためイノシシの格好の餌が増えた。イノシシは栗やミカンも食べるので、米作のみならず果実にも被害が及ぶようになった。竹の子も餌になるが山林を手入れしないため、里山にまで竹林が侵食し竹の子の増加につながっている。これらが原因でイノシシの繁殖、成育を助長したようだ。そこで里山の人々はイノシシ対策として回転灯を設置したり、ネットは破られ効果がないので金網の柵を設けたりする。しかし、イノシシは1.2m位まで飛び越えるので、それ以上の高さが必要となる。また、トタンの垣根をめぐらしたり、ラジオの音声を流し続ける。木酢や猛獣の糞をおいて臭気を匂わしたりもする。こうした中で今日イノシシを撃退するエースは電気柵（図2）を設置し低圧電流を流すことである。琵琶湖の西北地域の比良山の麓では民家や田畑を守るため、低く電線を張って通電してイノシシなど野生動物が近づかないよう処置してある。電圧が低圧とはいえ、雨降りや水ぬれに際しては人が触れると危険である。したがって接近禁止を徹底しなければならない。

野生動物が棲む自然環境はどうあるべきか、我々人間と共生できる方策を探らねばならない。イノシシ、鹿、それに熊も含め野性動物を保護管理するための環境政策が急務であると考える。

特産品――大根のベッタラ漬け――

猪名川流域には、あちこちに自然繁殖したクマザサが茂る（図3）。クマザサの繁茂に

図3　猪名川流域のクマザサ

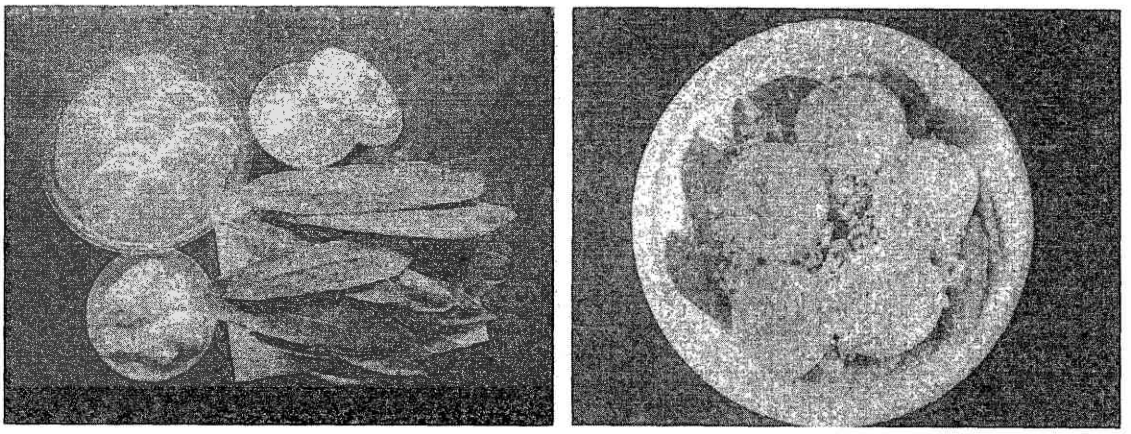

図4　猪名川流域の珍味　ベッタラの漬け込み

は水分と適度の日照、気温が整うことが必要なので、ここ猪名川流域はクマザサの生育に適しているのであろう。猪名川流域の多田地区では、冬の到来とともにクマザサが収穫されて旬の漬物つくりに利用される。それは「大根のベッタラ漬け」である。大根を千枚様にうすく切って、塩による下漬けを施す。

千枚漬けは京都伏見の聖護院かぶらが有名である。塩で下漬けの後薄切り千枚かぶらを昆布で挟んで順次重ね漬けする。樽にいれて自然発酵させるので甘酸っぱい味を生み出す。

猪名川のベッタラ漬けは麹を用いることが特徴である。下漬けした千枚切り大根は水分を拭い取り、麹床と交互に重ね漬けする。麹、塩および砂糖をブレンドして作った麹床を、クマザサの笹葉の上に敷いて下漬けした千枚切り大根をならべ、再び麹床を引く。交互に重ねて、最後に再びクマザサの笹葉を蓋代わりに載せる（図4）。重し石を置いて数週間経過すると、風味が備わったベッタラ漬けが出来上がる。漬け込むには気温が10℃以下になる師走の時期が好ましい。クマザサは葉の木質部分に含まれるポリフェノール（文献6）が有効成分であろうと考えられるが、それ以上の情報はない。クマザサの葉は刈り取って放置してもバクテリアが付きにくく、腐敗しにくい。防腐作用を有するからだろうと

図5　猪名川流域の名物　笹おこわ

推定される。医学的な研究で、クマザサの水浸液が蛙の摘出心臓やラットの摘出小腸を刺激して興奮させる作用があるとの報告（文献7、8）がなされた。最近、民間の健康増進商品として、クマザサ茶が日本のあちこちで製造販売されている。

特産品――笹おこわ――

猪名川町のエコフェスタは、秋の収穫祭を兼ねて例年行われる。名物のクマザサの笹葉に包んだおこわが出店に並ぶ（図5）。もち米を予め炊いて、これに山菜を混ぜ味付けして、クマザサの笹葉に包み蒸籠（せいろ）にて蒸す。さっぱりとした独特の味と、もち米の食感が頼もしい。

おこわは全国各地にあるが、ここ猪名川町のおこわはクマザサの笹葉で包むところに特徴があり、猪名川流域に多くのクマザサが生育しているからである。

古くからご飯など携帯食として持参する際、腐らないようにクマザサの笹葉で包む風習があった。（図6、文献9）

特産品――糸寒天――

冬季氷点下を下がる気温と、昼間水分が蒸発する気温と乾燥の条件は、猪名川流域に見られる気候の特徴である。寒天の主産地は寒冷、乾燥の気象条件を満たす長野県であり、

クマザサ　　英名：Striped bamboo　イネ科　原産：日本

隈笹と書きます。昔から笹飴、笹餅、おにぎりを包む等、食品の保存用装材に庶民の生活の中で、昔から使われてきました。
最近その薬効が注目され健康飲料として注目を浴びています。

（用途）　クマザサの持つ葉緑素は、薬理作用、生理作用があり、殺菌・制菌脱臭・抗アレルギー作用他広範多岐にわたります。

（薬効）　諸臓器の機能促進、血圧降下作用、強心作用、増血作用、組織抵抗力増強作用他

（部位）　クマザサの葉と茎から採取。

図6　クマザサの利用と効能（文献9）

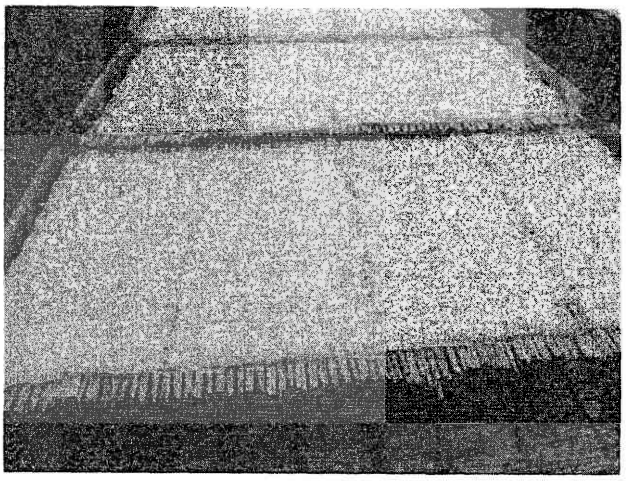

図7－1　下阿古谷（猪名川流域）における寒天の乾燥

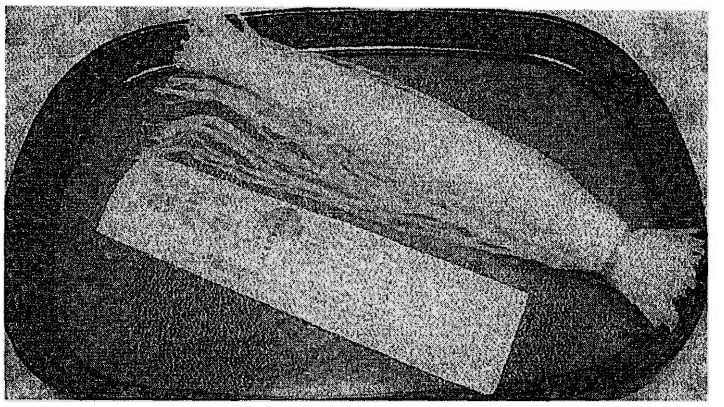

図7－2　猪名川流域の特産品　糸寒天

角寒天としてスーパーなどで販売されている。寒天の原料は海草のテングサであるが、外国産も含めて他の地域から購入した寒天は、水洗したのち釜で炊き、それを絞って不溶性のカスを除き、冷やして固める。網付きの筒に入れ、押し出しところてんのように細い紐状にする。凍結したのち昼中日干しして水分を蒸発する。数日間の繰り返しで糸寒天（図7）が出来上がるが、夜凍結する氷点下の気温と昼中水分が蒸発する気温と乾燥がここ猪

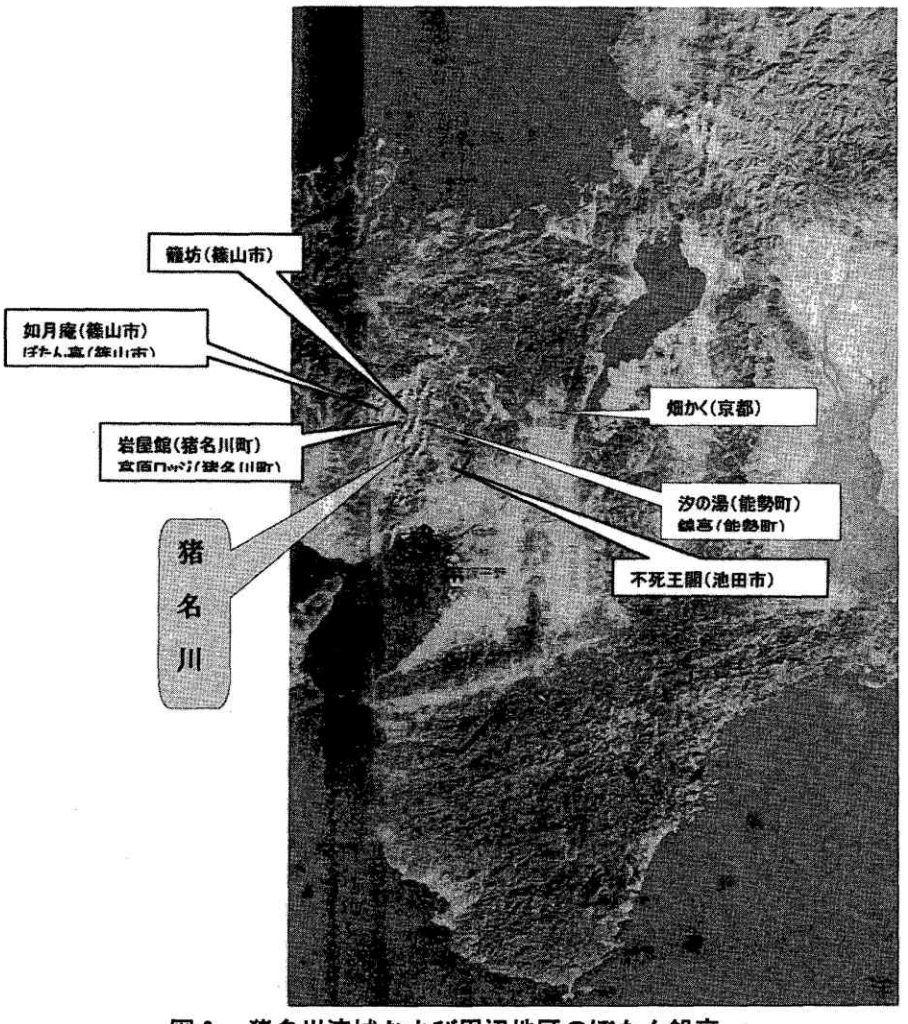

図8　猪名川流域および周辺地区のぼたん鍋亭

名川町にはあった。今日では下阿古谷地区に糸寒天の製造場所が残っている。この糸寒天は、猪名川地区でのみ入手できる。ちなみに寒天は食物繊維が多く生活習慣病の予防に有効であり、主に和菓子の食材として使用される。

猪名川流域のぼたん鍋

猪名川流域にはぼたん鍋料理を提供する料亭等が多い。シリーズ三篇（文献1、文献2および今回）を完結するに当たって、それらを記載（図8）し、論文の締めくくりとする。

猪名川町では屏風岩近隣の岩屋館、六瀬の高原ロッジ、能勢町では汐の湯温泉や錦亭、池田市の不死王閣、周辺に拡大すれば篠山市のぼたん亭、やまびこ荘、篭坊温泉、如月庵、亀岡市の湯の花温泉、るり渓温泉、京都市の畑かく等が知られている。

むすび

里山の良好な自然環境の保全には地域の条例、例えば猪名川町の環境基本計画条例と密接に関連している。例えば、里山の機能に関するシンポジウムが開催され、そこに棲息する野生動物のイノシシ、および森林の木材資源等について市民の啓発が計られた。神戸市にはユニークな条例、市街地のイノシシ被害をなくすための「イノシシ餌付け禁止条例」などがある。

一方、猪名川流域の伝統的な特産品には、クマザサ葉を重ね漬けした「大根のべったら漬け」、クマザサの葉で包んだ「笹おこわ」、野生イノシシの料理「ぼたん鍋」がある。これらの里山における伝統食の保全や野生動物の保護には、野生生物の適切な管理と、それに対する市民の深い理解を基に生まれてくる。

文献

1）里山の恵み――猪名川流域の食文化（1）―― 島崎千江子、水原道子、野波侑里、溝口正 大手前女子短期大学、大手前栄養文化学院研究集録 20、321-331 (2001)
2）里山の恵み――猪名川流域の食文化（2）―― 水原道子、島崎千江子、野波侑里、溝口正 大手前女子短期大学、大手前栄養文化学院研究集録 21、193-204 (2002)
3）国民参加の森林づくりシンポジウム 朝日新聞 平成14年9月29日（日）
4）山のイノシシ、徳島道に 朝日新聞 平成13年11月16日（金）
5）住民がイノシシに襲われる。 ＮＨＫラジオ放送 平成14年11月25日（月）
6）中薬大辞典 4巻 ページ2710
7）クマザサ Bambusa veitchii の薬理作用（1） 小川廣昌 医学中央雑誌 96、599 (1951)
8）熊笹 Bambusa veitchii の薬理作用（2） 小川廣昌 医学中央雑誌 97、358 (1952)
9）http://homepage1.nifty.com/avril/herbsenryo.html